

〈資料〉

映画の内容分析 (4)*

——映画評論家も映画雑誌読者も共通に好む日本映画とは？——

藤 原 武 弘**

藤原（1989）は、映画評論家と一般の人々の映画嗜好の違いを明らかにするために、1981年度から1988年度までの『キネマ旬報』のベスト・テンの分析を行なった。その結果読者の評価と評論家の評価が一致しない外国映画一覧をはじめ明らかにした。また藤原（2005）は1990年度から2003年度までのベスト・テン・データ、更に藤原（2011）は1955年度から2010年度のほぼ半世紀にわたるベストテン・データで同様の分析を行なった。分析の手順は以下のごとくである。キネマ旬報の読者のベスト20には入っているが、評論家のベスト20には登場しない映画、そして逆に、評論家のベスト20には入っているが、読者のベスト20には登場しない映画がどのような映画であるのかを示した。筆者は、「読者偏愛」の映画、後者を「評論家偏愛」の映画と筆者は命名している。ただ1955年から1971年までは、男女別々に集計が行なわれていたこと、そして選考委員の数が少ないという問題もあり、ベスト20ではなくベスト10で集計・分析を行なった。同様の分析は日本映画に対しても行われている（藤原、2013）。

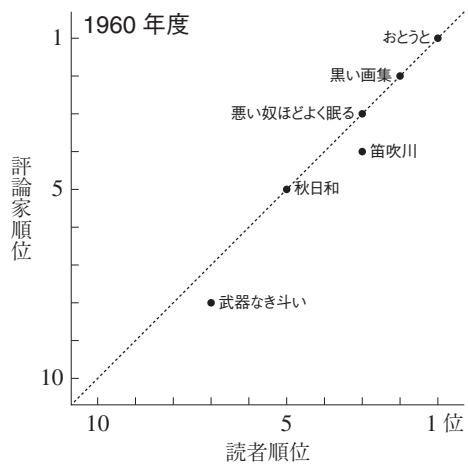
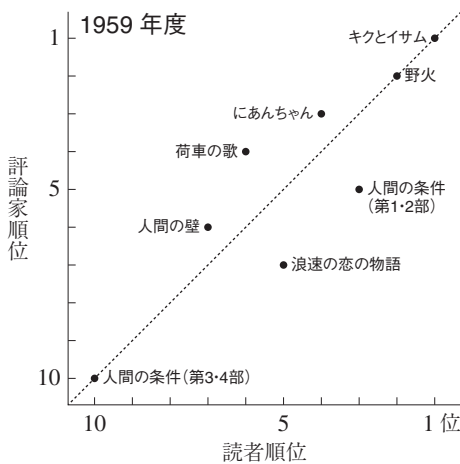
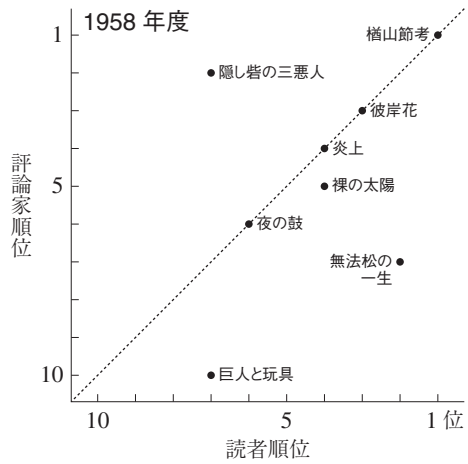
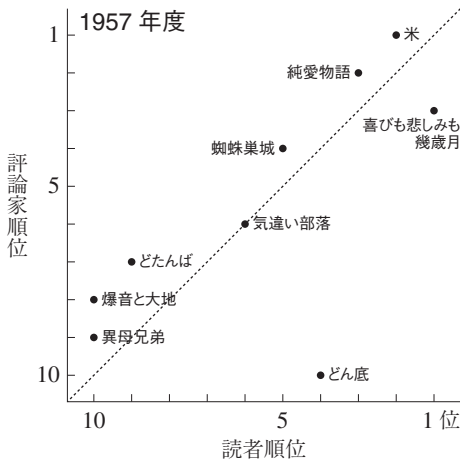
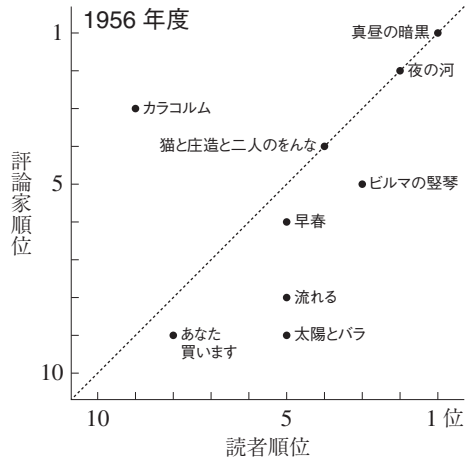
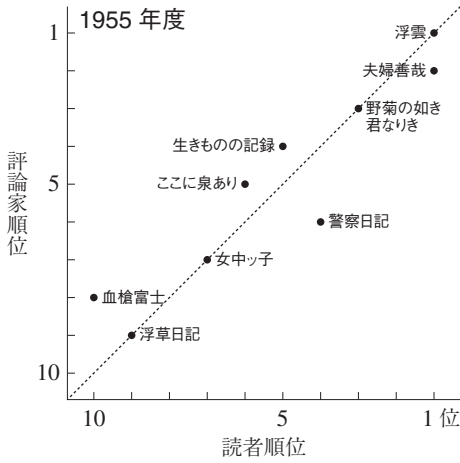
上述した藤原（2011, 2013）の研究の主眼は、評論家と一般読者の間で映画への嗜好の差異・乖離を明らかにすることであったが、本研究においては映画評論家と映画雑誌読者の嗜好の共通な部分に注目する。既にある年度に限ってではあるが、両者の共通性に注目した研究も存在する。すなわち、1981年度から1988年度に関しては藤原（1989）、2001年度から2003年度に関しては藤原（1989）で既に報告してきた。また藤原（2014）

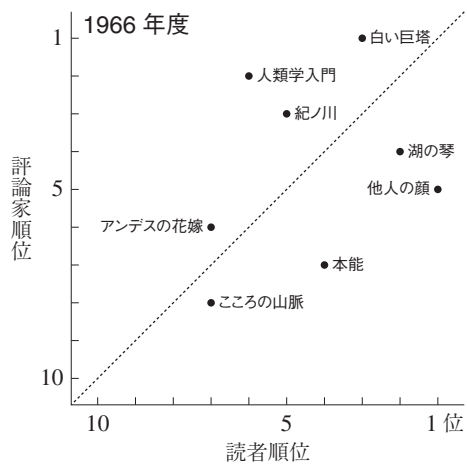
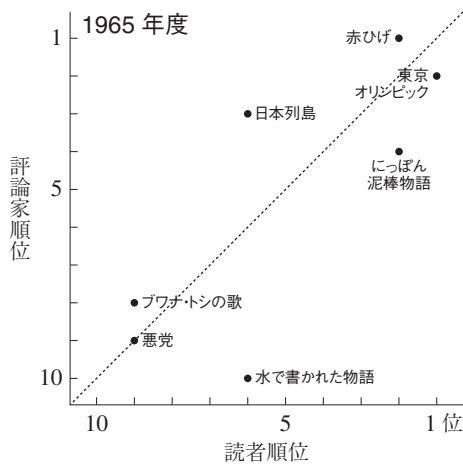
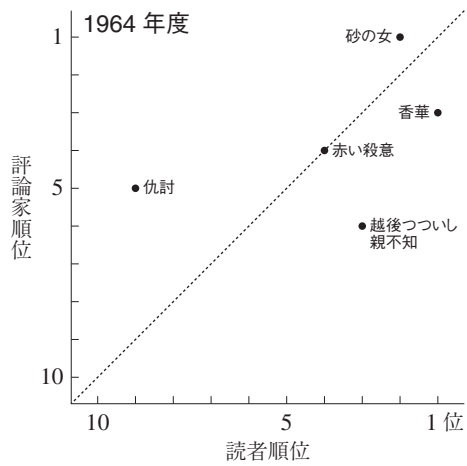
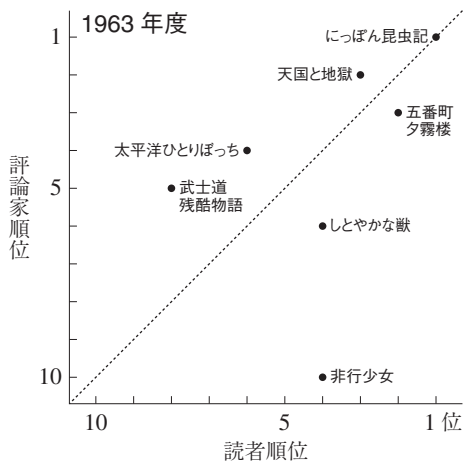
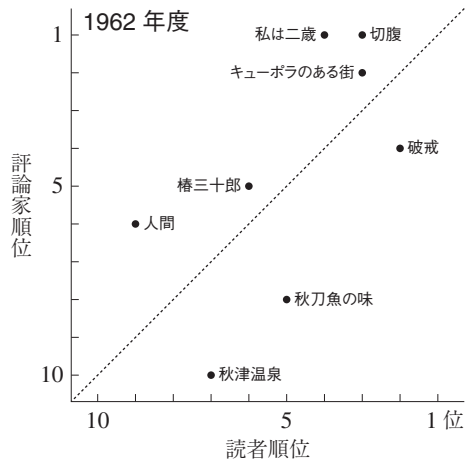
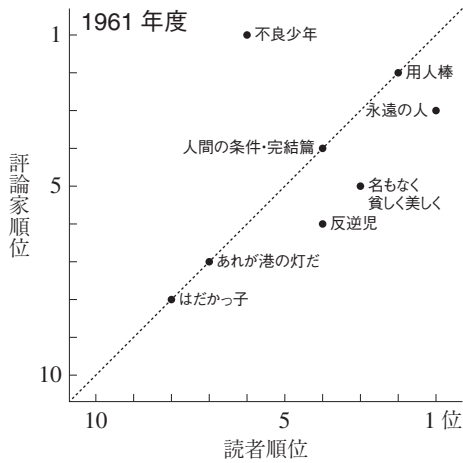
は、1955年度から2010年度に公開された外国映画を対象に同様の分析を行ってきたが、今回は日本映画を対象として、1955年度から1971年度までは『キネマ旬報』ベスト・テンで共通に上位10位までに入る日本映画、1971年度から2010年度までは共通に上位20位までに入る日本映画をカウントした。図はその結果を図示したものである。横軸が映画雑誌読者の順位、縦軸が映画評論家の順位が2次元の直交座標軸上に示されている。この図の45度の直線上にある映画は、評論家の評価とキネマ旬報の読者の順位がぴったりと一致する映画である。この直線から離れるに従い、映画評論家と映画雑誌読者の間に乖離が生じていることを意味する。両者の評価にズレが少ない映画群は、鑑賞者のキャリア・レベルとは無関係に高い評価をうけていることから、良好でバランスの取れた映画と言えるかもしれない。微妙な違いだが、45度の直線から下方向に位置している映画は、読者が相対的に高い評価を下している映画で、映画雑誌読者好みの映画である。逆に、45度の直線から上方向に位置している映画は、評論家が相対的に高い評価を下している映画で、映画評論家好みの映画ということになる。とはいえ今回の報告は、藤原（2014）同様に両者の差異と言うよりは、共通性に注目して分析を行なった結果の報告である。

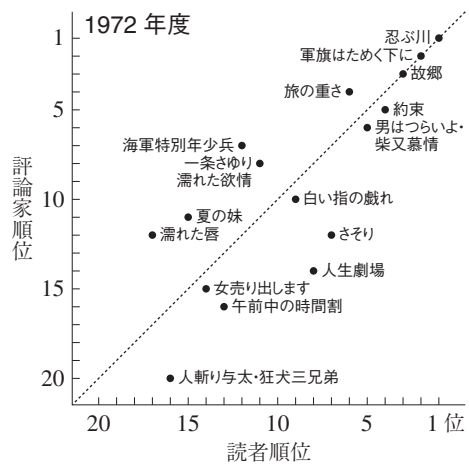
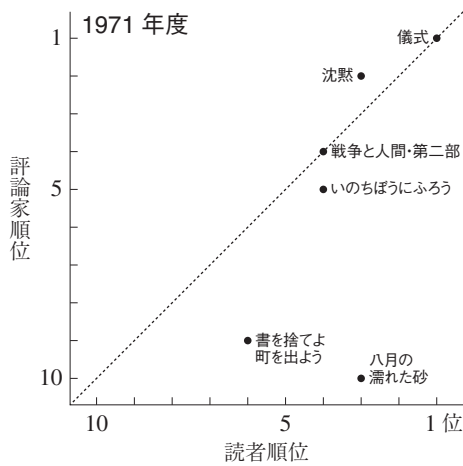
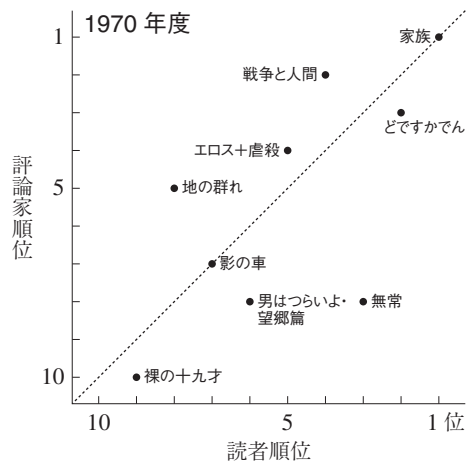
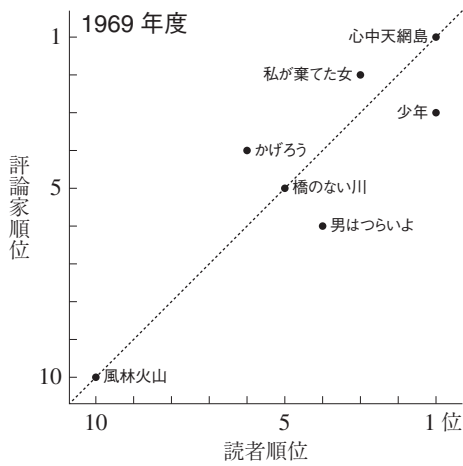
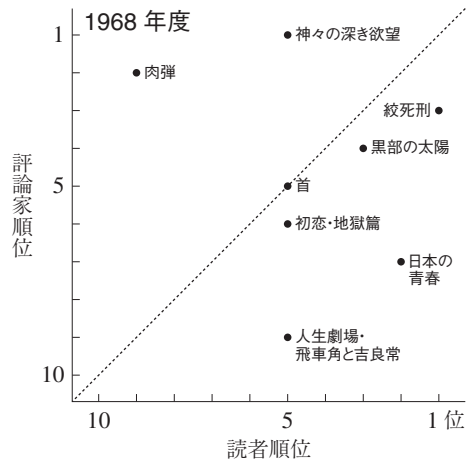
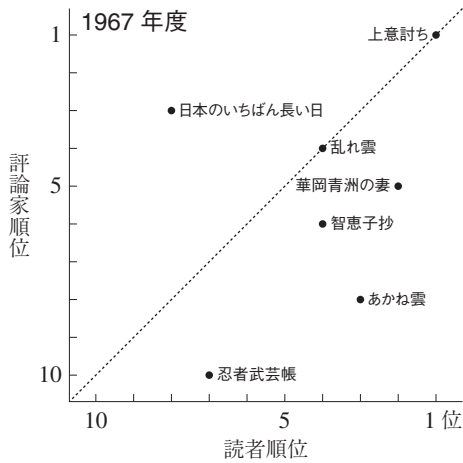
両者の共通性を示す年度別の一致率は図2に示されている。1955年度から2010年度までの年度全部を通しての平均一致率を計算すると75%である。なお1955年度から1971年度までの平均一致率は76%、1972年度から2010年度までの平均

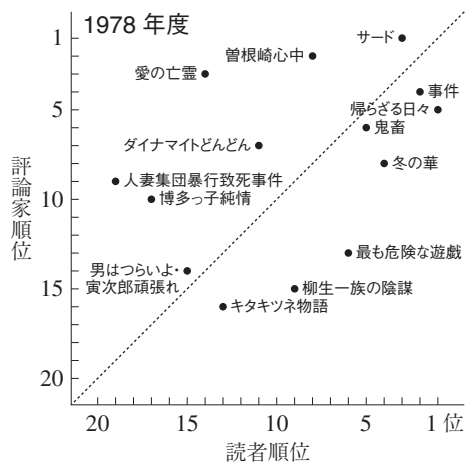
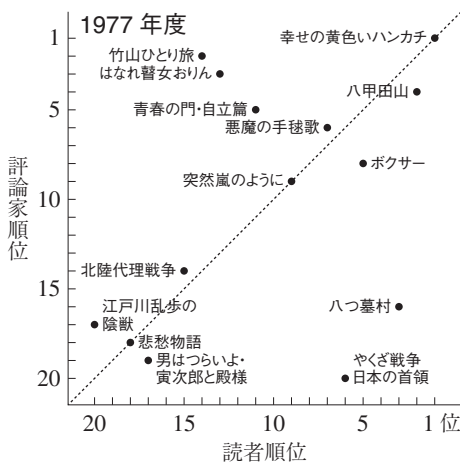
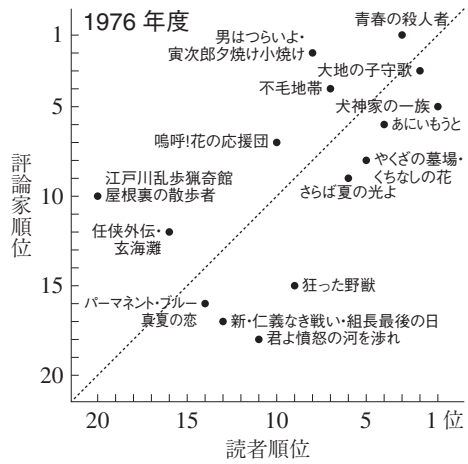
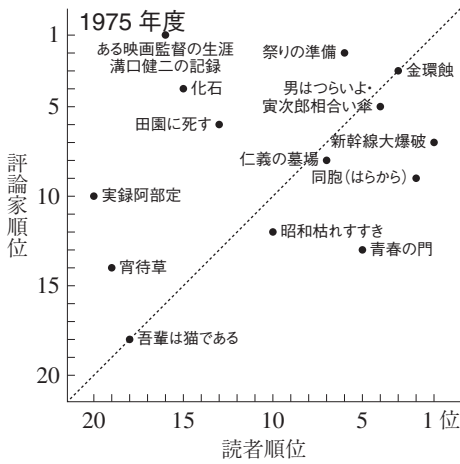
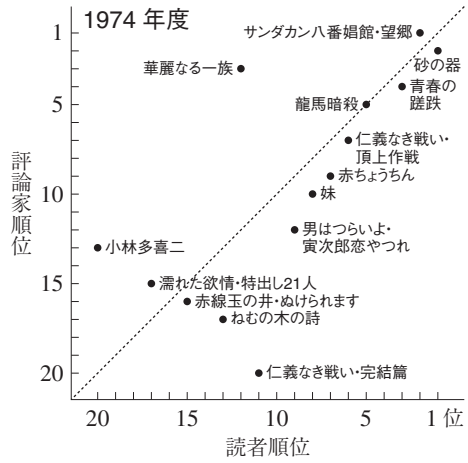
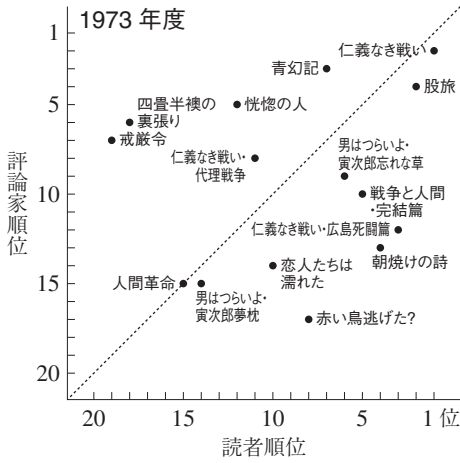
*キーワード：映画嗜好、映画評論家、映画雑誌読者

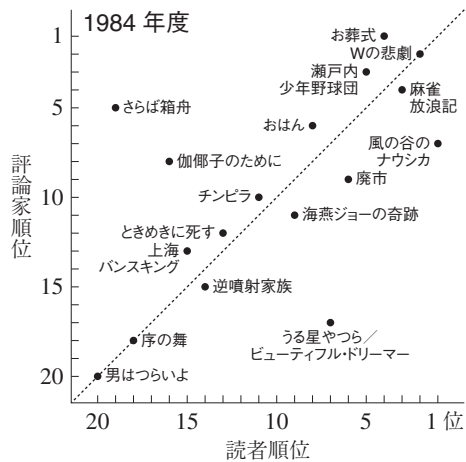
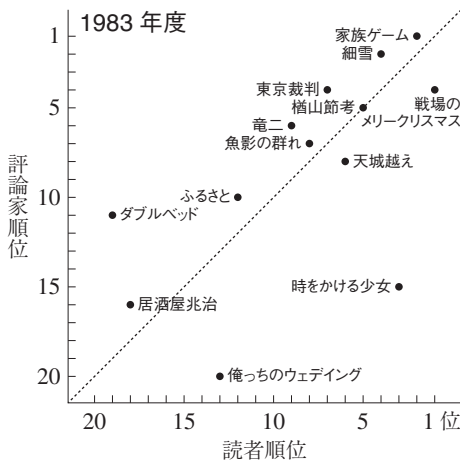
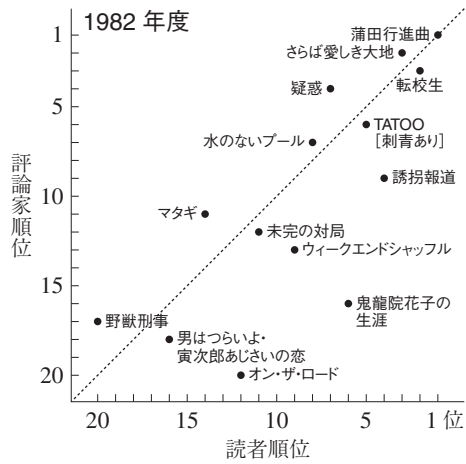
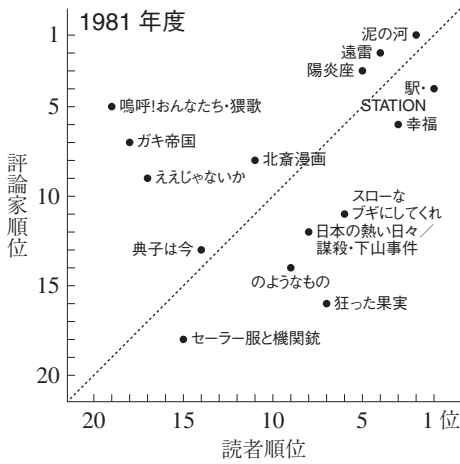
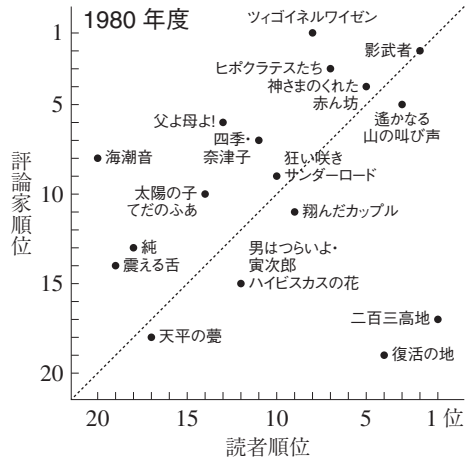
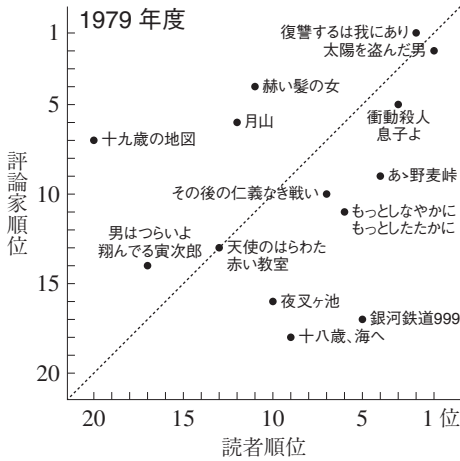
**関西学院大学社会学部教授

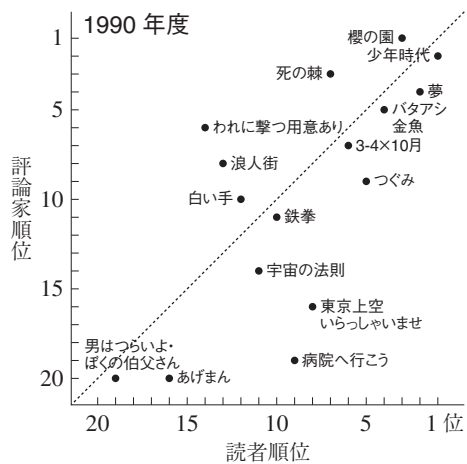
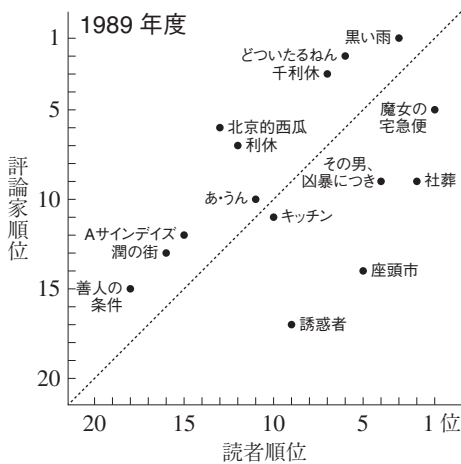
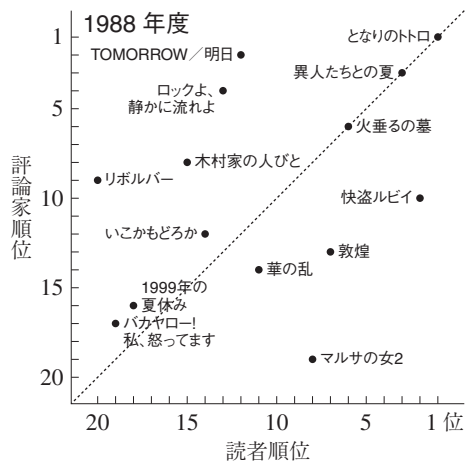
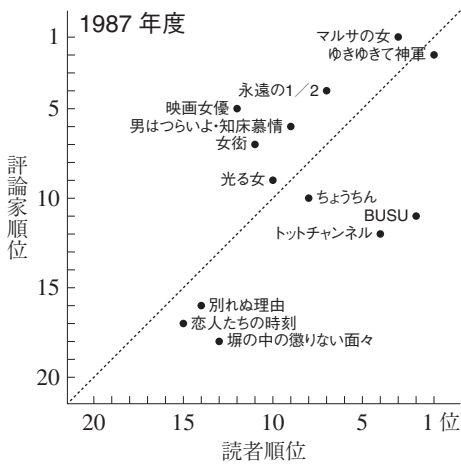
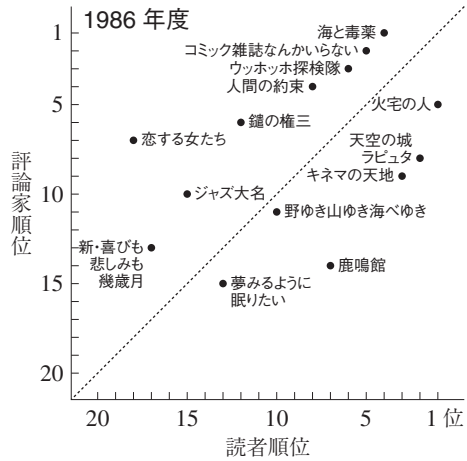
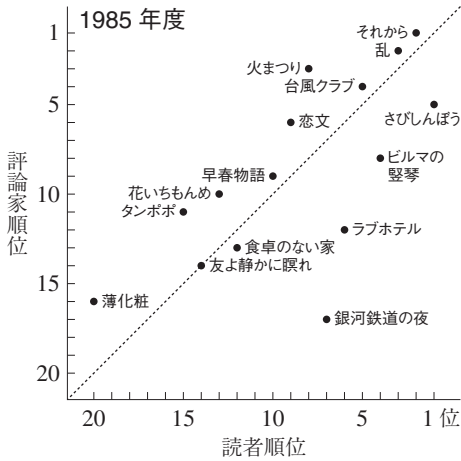


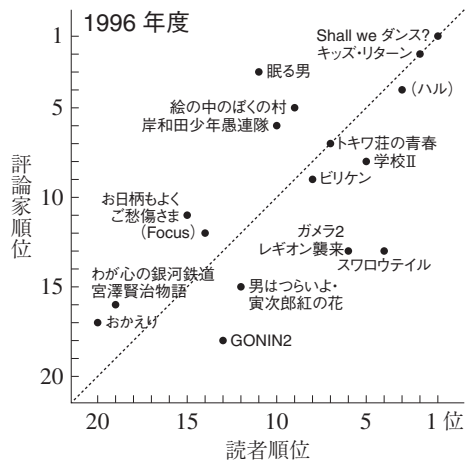
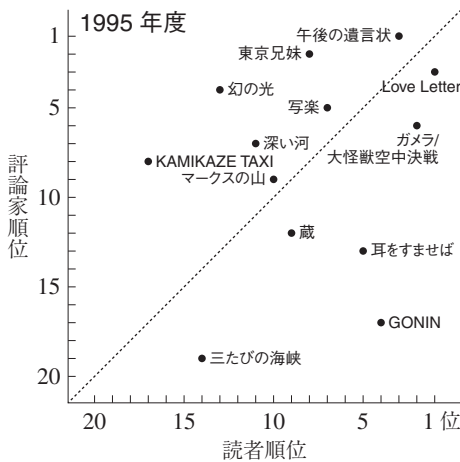
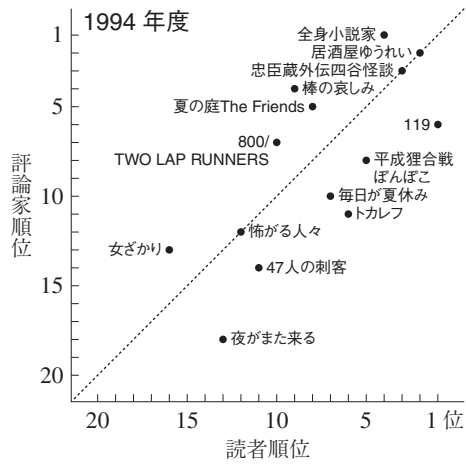
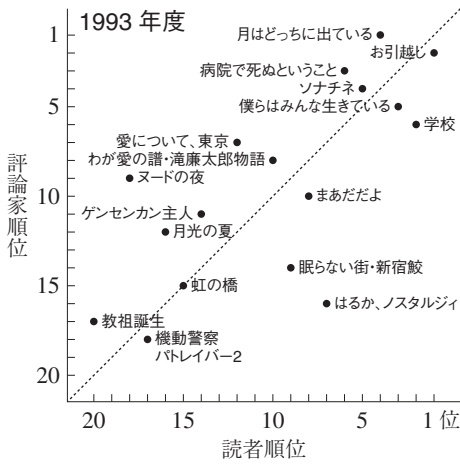
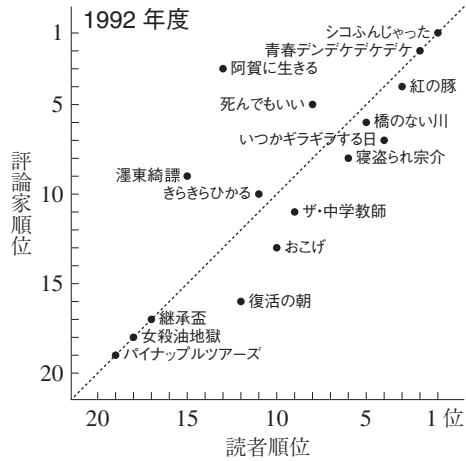
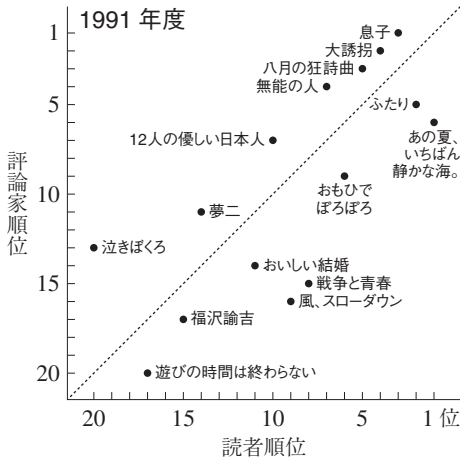


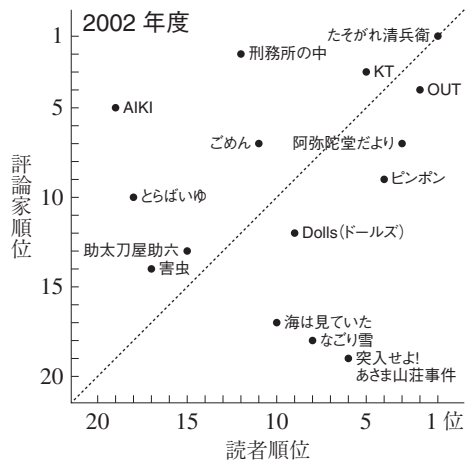
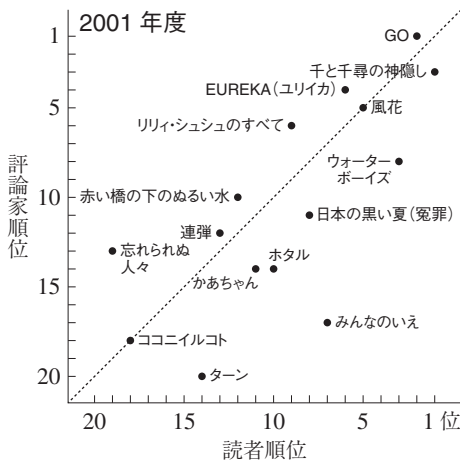
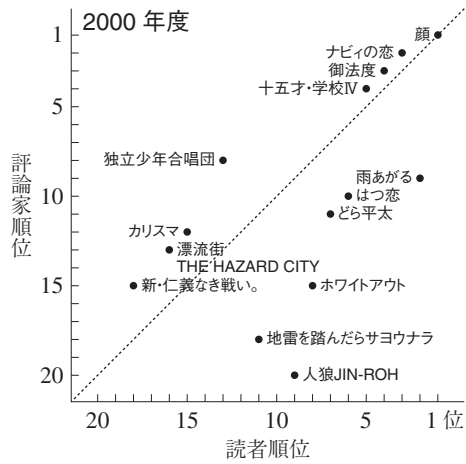
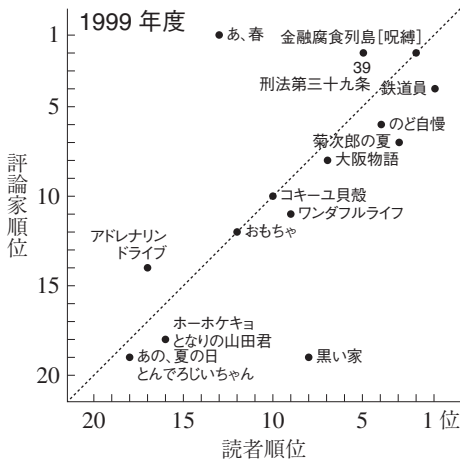
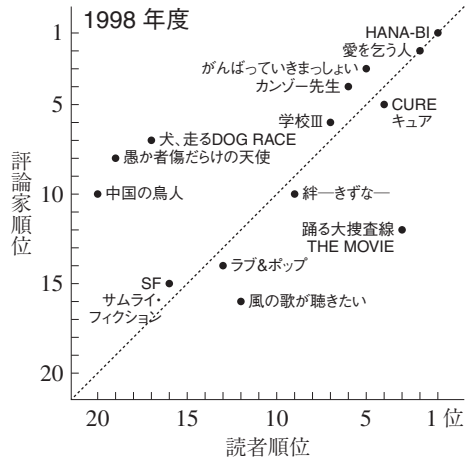
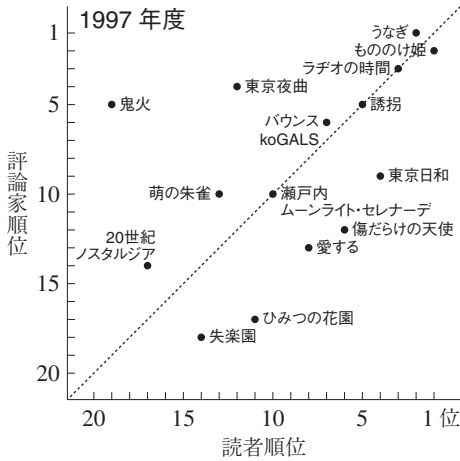


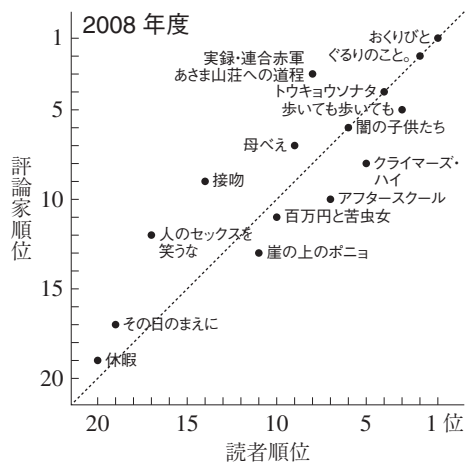
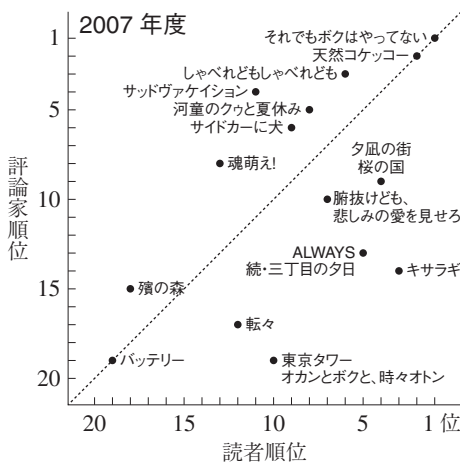
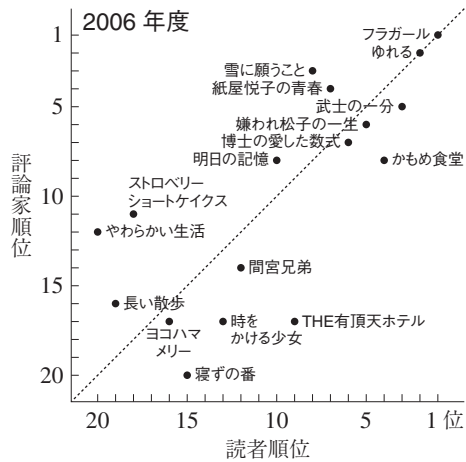
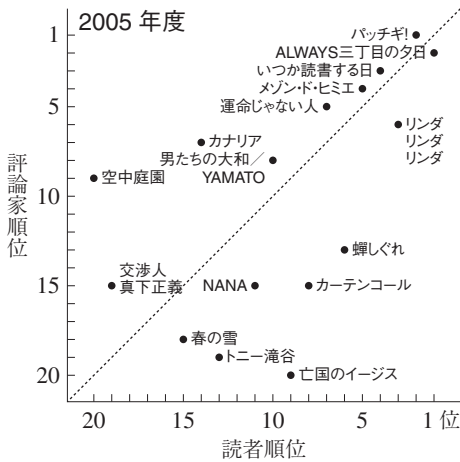
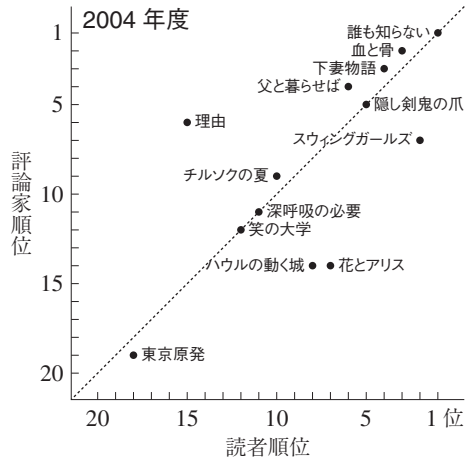
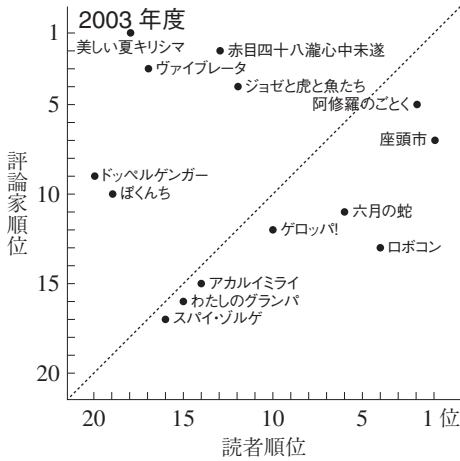












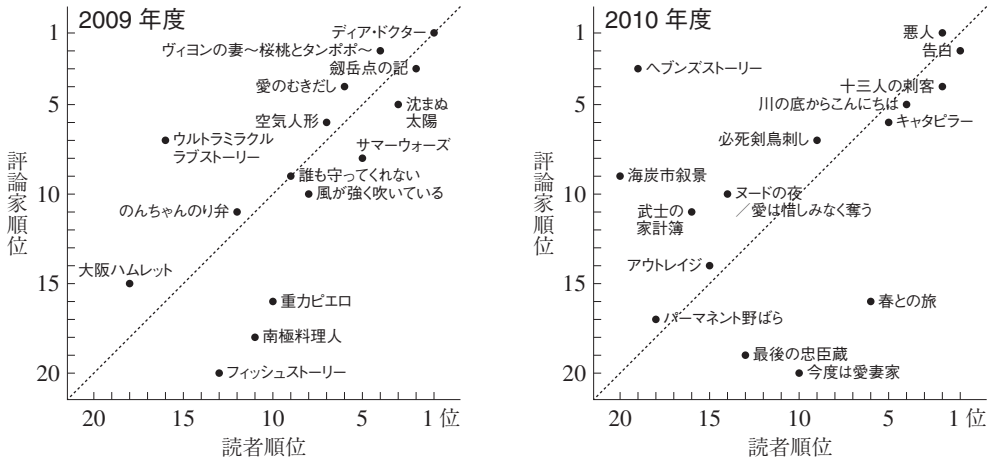


図1 二次元座標軸上にプロットされた映画評論家の順位と映画雑誌読者の順位

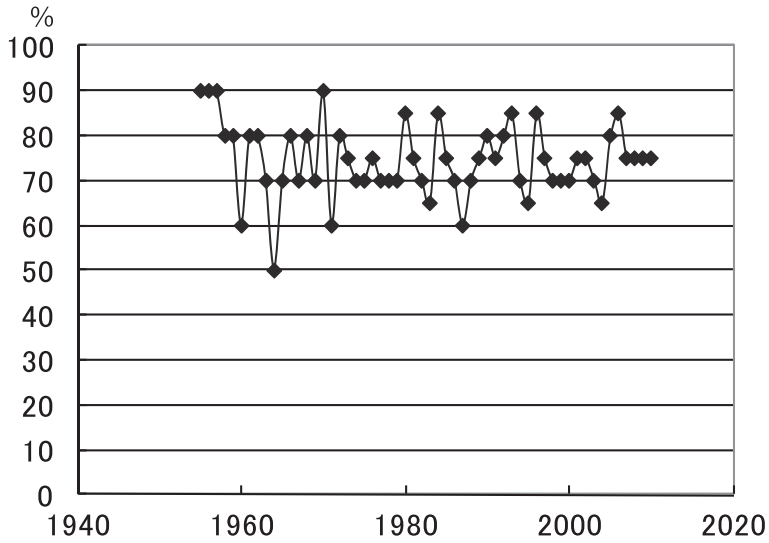


図2 年度別に見た一致率の推移

一致率は74%である。

また読者偏愛映画ならびに評論家偏愛映画も含めたベン図を作成すると、図3に示したように、両者共通に高い評価を受ける日本映画は59%、評論家偏愛映画20%、読者偏愛映画21%となる。なお1955年度から1971年度までの両者共通に高い評価を受ける日本映画は60%、評論家偏愛映画18%、読者偏愛映画22%となる。1972年度から2010年度まで両者共通に高い評価を受ける映画は59%、評論家偏愛映画21%、読者偏愛映画20%となる。最近『死ぬまでに観たい映画1001本』という書物が出版された (Schneider, S.

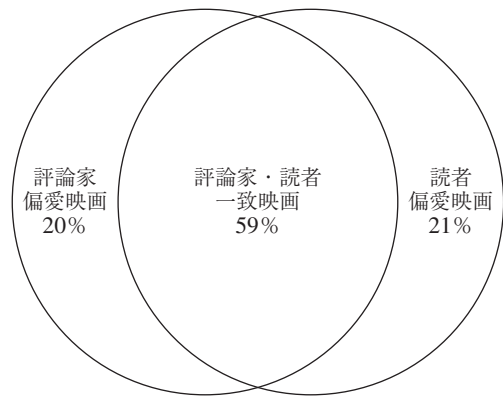


図3 一致映画と不一致映画の割合

J., 2011)。どのような手続きで 1001 本の映画が選択されたのかは、書物の中には明確には書かれていない。「良い映画とは何か」という問いに答えることは難しいが、一致率に基づく筆者の映画選択方法はある程度の客観性があり、優れているのではないと思われる。筆者のお薦め映画は、評論家の評価と読者の評価が一致する日本映画である。それを筆者は『天国まで DVD で持っていたい日本映画編 706 本』と勝手に名づけている。なお外国映画との比較でいえば（藤原, 2014）、日本映画の方が若干ではあるが評価の一致率が高い。言い換えるなら読者と評論家との間に評価の隔たりが少ない。

引用文献

- 藤原武弘 1989 シネマ・サイコー映画心理学 福村出版
藤原武弘 2005 第7章 映画の心理学－映像コミュニ

ケーションの魅力 子安増生（編著）芸術心理学の新しいかたち 誠信書房

- 藤原武弘 2011 映画の内容分析（1）関西学院大学社会学部紀要、第 113 号、69-77.
藤原武弘 2013 映画の内容分析（2）関西学院大学社会学部紀要、第 116 号、135-155.
藤原武弘 2014 映画の内容分析（3）関西学院大学社会学部紀要、第 118 号、103-115.
『キネマ旬報増刊 映画 40 年 全記録』1986 キネマ旬報社
『キネマ旬報ベスト・テン 80 回全史』2007 キネマ旬報社
『キネマ旬報ベスト・テン 85 回全史 1924→2011』2012 キネマ旬報社
Schneider, S. J. (Ed.) 2011 1001 movies: You must see before you die. A Quintessence Book. (野間けい子 (訳) 2011 改訂新版 死ぬまでに観たい映画 1001 本 ネコ・パブリッシング)

Content Analysis of Films (4)

—Similarities in Japanese Film Preferences between Film Critics and Film Journal Readers—

ABSTRACT

This study illustrates communalities and similarities in Japanese film preferences between film critics and readers of the film journal *Kinema Junpō* using journal ranking data from 1955 to 2010. Films that commonly received rankings of lower than 20 by film critics and readers were defined as “high agreement films”. The results indicated that the average agreement ratio was 75%.

Key Words: film preference, film critics, film journal readers